煽ってないと死んでしまう人（笑）がダンジョンに出会いを求めるのはまちがっているだろうか？

聖籠

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

煽ってないと死んでしまう人が色々な人を煽って楽しく生活する話です。

文章力とかダメダメなので変になっててもおおめに見てください。

目　次

プロローグ ―― 1
こっちは短いけどあっちは長かった再開 ―― 5
ベル・クラネルとの出会い ―― 8
突撃～ ―― 10
これからどうしよっかなー ―― 12
怪物祭 ―― 15
そりゃあ、まあ驚くよね… ―― 20
お茶会 ―― 24

プロローグ

どうも皆さん　リュウ・セイヤです。

リュウは危機的な場面なのにも関わらず頭がおかしくなったのか挨拶を始めた。今は闇派閥の罠にかかり、ジャガーノートというモンスターが生み出され、ファミリアのメンバーはリューを除いて全滅。残りのリューも戦える状態ではない。唯一無傷なのはリュウ1人。

「ま、俺が戦うしかないよな。ということでリュー。お前は逃げな。」

「しかし、私も戦います！」

「魔力も少なくて回復魔法も使えないだろ？あと、死んで行ったあいつらはお前を守ろうとしたんだからな？それも汲み取ってやれよ？」

俺が話すとリューは一瞬躊躇ったが言うことを聞いてくれた。

「じゃあ、あいつも行ったことだし、やりますか？なあ、ジャカーノートさんよ。」

リュウは自分の最大火力が出せるように準備を整える。

「まあ、力をちょっと借りますぜ。《智天使憑依》」

するとリュウの服装が変わり、神々しいオーラが溢れてきた。右手に持っている炎の剣に全魔力を込めて、ジャカーノートに突っ込む。ジャカーノートもリュウを排除しようと攻撃をしてきた。1人と一体の攻撃が同時に当たると辺りに爆発が起きた。リュウは能力を作りそれを行使してそのまま気を失った。

目が覚めると別の階層に落ちたようだった。無事に作ったスキルが発動したようだ。スキルで確認してみると５０階層だった。どんな確率でそんなに下の階層に行けるのかと疑問に思ったが今は触れないで置こう。ちなみに作ったスキルは安全になるまで時間と場所を飛ばすという能力だ。５０階層となると助けも求められない。そう思い歩いているとふと思った。そういえばスキル作成のクールダウンは終わっていた。なのでリュウは近くにいる人の所へワープするという能力を作った。能力を行使すると見覚えのある顔達のところにワープした。

「あ、フィン達じゃん。どうも」

「ん？」

「あれ？忘れちゃった？俺だよリュウ。リュウ・セイヤ。」

「リュウ!?お前は死んだはずじゃ!?」

「え？どうなってんの？」

話聞くと俺は5年前に死んでることになっていたらしい。まあ、死体もなかったから、すぐには死亡とはならなかったらしいけど1年経って見つからなかったから死亡になったらしい。

「へー、そういうことなんだ。じゃあ、帰り道知らないから教えて？」

フィンは快く受け入れてくれた。条件付きで。俺の《操作》の魔法で荷物を軽くしてくれるならと。まあ、そんなことなら大丈夫だからと引き受けたけど。地上に着くと一緒に打ち上げに行かないかと言われたのでもちろんと答えた。

リュウｓｉｄｅｏｕｔ

リユーside

ジャガーノートとの戦いから5年が経った。今は豊饒の女主人という酒場で働いている。18階層に戻り、回復してすぐジャガーノートと戦ったところに向かったがジャガーノートとリュウが消えていた。戦いの余波だろう、爆発が起きたようにダンジョンの床に穴が空いていた。仲間の遺体を探したがリュウの死体だけなかった。いつも人をおちょくってばかりだったが真面目にやる時はやる人だった。出来ればまた会いたい。また会ってお礼がしたい。今日はロキファミリアが予約していた日なので忙しくなる。そう思っているとロキファミリアが来た。いつもの面々に1人だけ違う人物が混じっていた。黒い髪のハーフエルフ。それは私がずっと会いたいと思っていた人物だった。

リュウ・セイヤ
種族　ハーフエルフ
力　999　S
耐久999　S
器用999　S
俊敏999　S
魔力999　S
魔法
《操作》コントロール…あらゆるものを操作できる。しかし自分よりレベルの高い者などは操作しずらい。
《智天使憑依》…一時的にケルビムの力を借りることができる。ただし魔力はごっそり持っていかれる。

スキル

禁果創造《フォービドゥン》…スキルの作成が可能。持続時間は1日。クールダウンは一日半。能力は決めれるが効果の強さはランダム。

解答者《アンサートーカー》…どんなことでも答えが瞬時にでる。

急成長…ステイタスが早熟する

こっちは短いけどあっちは長かった再開

リュウが豊饒の女主人に入るとリューに似ているウエイトレスがいた。俺を見るなり泣き出した。
「俺なんかしたっけ？」
「忘れてんですか？リューです。」
そう言われたのでよく観察してみると髪の色同じ。顔同じ。変わっているのは髪の長さ。ロングヘアから首元ぐらいまでに切られていた。そして最後にスキルで確認。リュー・リオンと出た。
「ミアさーん、この子借りても？」
「ふん、用事があるなら早く済ませな」
相変わらず男勝りだなー。
「リュー大丈夫だったか？」
「リュウこそ！死んだと思ったんですから！　5年間何してたんですか！」
「5年間何してたと言うより、5年間タイムスリップしてきたという方が正しいかなー」
リューが何言ってるんだという目で見てきたのであの後のことを説明した。
「ロキファミリアが居て良かったですね。」
「いや、まあね。いなかったら地上にワープする能力作ってたんだけどね。」
「でも、あなたのスキルですから…」
「そう。オラリオに出るか分からないんだよねー笑」
リュウに再開したリューはどんどん話し込む。リュウは一瞬しか経っていないがリューの方は5年も経っているからと、リュウは仕方なく思って聞いている。
「リュー、そろそろ戻った方がいいんじゃないか？」
リュウが目線だけでそっちを向くように指示するとそこにはミアさんが睨んでいた。それに気づいたリューはまた「明日、この裏に来てください。」と言い仕事に戻っていた。

「ミアさん。今日のおすすめお願いしやす。」
「はいよ。」
リュウがロキファミリアのところに戻るとアイズが近寄ってきた。
「久しぶりに会ったね。５年間何してたの？」
「俺は久しぶりでもなんでもないんだけど大きくなったなー」
と俺は５年前と同じようにアイズを撫でてやった。するとアイズ大好き犬ことベートがやってきた。
「おい、リュウ！アイズから手を離せよ！」
「はいはい。分かりました。アイズガチ勢君笑」
「うっせーよ！」
まあ、ベート弄りはこれぐらいにして、出てきた飯を食った。そのあとは５年間何があったか聞いた。
「へー、アイズ。Ｌｖ５になったんだ。これは抜かれるのも時間の問題だな。」
「そんなことなかろう。お前はスキルを使えばオッタルとも普通に戦えるだろう？」
ちっ、リヴェリア余計なことといいやがって。あ、嘘です。嘘ですから、リヴェリアさん、そんなに睨まないで
「心の中読まないでくれよ。お母さん。」
「お前にお母さんと呼ばれる筋合いはないわ！それとお前の考えることは大抵読める。」
「さすが、リヴェリアと俺の仲だ。」
リヴェリアとは小さい頃から俺が執事として、ずっと一緒にいた。まあ、執事らしいことなんてしてなかったけど。常にタメ口だったし。まあ、リヴェリアの場合敬語で話して欲しくなかったらしいからちょうど良かったけど。
「さて、そろそろお暇しますか。ミアさん、料金はロキファミリアが払ってくれるらしいです。ごちそうさまでした。」
そう言って、店を出たのはいいがアストレアファミリア無くなったって聞いたし、どこで夜を過ごそうか。

悩んでいると、白い髪の少年が飛び出て行った。
中を覗いてみるとなんとも言えない空気だった。
「おや、リュウ帰ったはずでは？」
「リュー。いやなんか少年が飛び出して来たから。」
「それでしたら」
リューが言うには、ベートがミノタウロスの件を酒の勢いで笑い話にして、その話に出てきた少年がさっきの少年だったと。
「まあ、逃げ出す気持ちは分からんでもないが、食い逃げしちゃった？じゃあ、料金立て替えておくわ。ミアさんに渡しておいて。」
リュウはそういい、少年の飯代を払ってあげた。
「出来ればあの少年のことを追ってくれたら嬉しいのですが。」
「あ、はいはい了解。」

ベル・クラネルとの出会い

少年を追いかけ、バベルの塔までやってきたリュウ。
ダンジョンに行ったと思い、バベルに入ろうとするとそこには1人の神がいた。
「おっと、滅多に顔を見ないレア物の神様じゃありませんか。」
「あら、酷い言われようね。あなたには定期的に会いに行ってるじゃない？それにしても久しぶりね。5年ぶりかしら」
「そっちは久しぶりであってるのか。あと、会いに行ってるってただ勧誘しに来てるだけじゃねえか。」
バベルの入り口にはフレイヤがいた。どうせ誰か自分のファミリアに入れようとしてるのだろう。
「で、今回は誰を？もしかして白い髪の少年だったりしないよな？」
「あら、よくわかったわね。だってあの子の魂綺麗なんだから」
フレイヤはうっとりしながらそう言う。白い髪少年…面倒くさいのに目をつけられたな。
少し時間を取ったが予定通りダンジョンに入る。聞いた話では駆け出しと言うことなのでそんなに深い層には潜っていないだろう。
一応　、解答者《アンサートーカー》で見ておこう。
ん？今は5階層いや6階層に突入したのか…。
情報によるとまだ半月も経っていない冒険者らしいが大丈夫なのか？
リュウは心配をしながら6階層まで潜った。6階層につくとそこには情報通り白い髪の少年がいた。リュウは声をかけようとしたがすぐやめた。少年はウォーシャドウと戦っていた。しかも2対1で。しかし、危険になるまで邪魔はしないでおこう。この子は酒場で言われた弱さを認め、憧れの人に追いつこうと強くなろうとしている。それを邪魔するのはダメだろう。リュウはそう思い、結局少年が倒れるまでずっと見守っていた。
少年が倒れるとリュウは急いで少年を担いでダンジョンから出た。そして今気づいたが少年の名前と所属ファミリアを聞いていなかっ

た。スキルで見るとしよう。限定的に調べればその他の情報も出てこないだろう。
なになに、名前はベル・クラネル。所属ファミリアはヘスティアファミリア。
へー、あのヘファイストスのところの居候していた神様か～。
ファミリアが分かればあとは簡単スキルで調べて行くだけ。
ベルを担いで廃教会まで来ると入り口らしきところでヘスティアが待っていた。
「誰だい君は。って後ろにいるのベル君じゃないか！」
「ああ、ダンジョンで倒れてたので連れてきました。」
「ん…ここは？」
ヘスティアにここに来た経緯を話しているとベルが起きた。
「あ、起きたんだ。じゃあ俺は帰りますね。」
「君名前を聞いてもいいかい？」
「リュウ・セイヤ。それが名前です。」
リュウはそう言い、廃教会を去っていった。
朝になったので昨日リューに言われた通り豊穣の女主人の裏に来た。そこにはアストレアファミリアにいた頃と同じ鍛錬しているリューの姿があった。
「約束通り、来てやったぞ。あと少年も無事届けたぞ」
「お疲れ様です。それではこの5年間あなたがいなかった時にオラリオに何があったか、そして私が何をしていたかお話しましょう」

突撃～

ベルを届けたあとリュウは豊穣の女主人の裏に来て、リューの話を聞いていた。リューはリヴィラに帰り助けを呼びリュウ達が戦闘していた場所に帰ると大きな穴があったらしい。そして1年探し続けリュウが死亡判定になるとリューは闇派閥に復讐したそうだ。復讐し終わる頃にはブラックリストにも入れられたらしい。そして、路地裏に力尽きている所を助けられたらしい。そしてリューを助けたのが…

「そう、わたしです♪」

「うわ、びっくりしたー」

「シル!?まだ寝てるはずじゃ…」

リューが顔を真っ赤にしながらそう言うと

「いや、話し声が聞こえたましたから、リューと誰が話してるのかなーって思いまして。」

「お!君がシルか。リューを助けてくれてありがとう」

「もしかしてあなたがリュウさんですか?いえいえ、人が倒れていたら助けるのが当たり前ですよ♪」

そのあとはシルも話に加わり、その後のことを開店まで色々話してくれた。

「そろそろ、俺は失礼するぜ。」

「いちおうですが、聞いておきましょう。どこへ行くつもりですか?」

「そんなに俺の事を心配してくれるの?嬉しいな～」

「早く答えてください!」

「いっちょ帰ってきた記念に神の宴にでも殴り込みに行こうかと。」

リュウがそう言うとリューがポカーンとしていた。

「なぜそんなことを?」

「面白そうだから?」

「なんであなたが聞いてくるんですか!」

「それでは～」

後ろの方から声がまだ聞こえるけどそんなことお構い無しにバベ

ルへ向かうリュウ。
　そのまま、神の宴へ参加（侵入）し、お目当ての神を探す。
「あ、いたいた。ヘファイストス様～」
「リュウ？生きてるとは聞いたけど、貴方なんでここにいるの？」
「いや、一応報告と顔合わせでもしておこうかと」
　リュウは目的の神物がくるまでヘファイストスと雑談していた。
するとタッパーに食べ物を突っ込んでいる女神を見つけた。
「あ、ヘスティア様だ～、こんにちは～」
「誰だい君は？ってベル君を届けてくれたリュウ君じゃないか！この間は済まなかったね」
「いや、知り合いに頼まれてやっただけなので」
「あら、ヘスティア。リュウと知り合いなの？」
　ヘファイストスも加わり、知り合った時のことを話していると周りがざわめき出した。どうやらフレイヤが顔を出したようだ。
「まあ、こんな所でリュウに会えるなんて。やっぱりうちのファミリアに来ない？良くしてあげるわよ？」
「いや、遠慮してきます。あんたのところの団員が怖いんで」
「あら、そう残念。あ、ヘスティアあなたに用事があったのよ」
「え？君が僕にかい？」
　フレイヤがヘスティアを呼び話をしていると遠くから猛スピードで走ってくる神がいた。

これからどうしよっかなー

「おーい、ファイたーん、フレイヤー、ドチビ！」
「なんで君がここに居るんだよ！」
「え？宴に理由が必要か？まったくこのドチビは…」
　相変わらず仲の悪い２人。会う度に喧嘩してんなぁー
「ふん、君みたいな絶壁を相手してる暇は無いんだ。」
「お、やるんか」
　そのロキの一言で女神たちの喧嘩が始まった。
「えー、始まってまいりました。ロリ巨乳対絶壁。実況は私セイヤ・リュウでお送りします。そして解説にフレイヤ様、ヘファイストス様でお送りします」
「なんか、巻き込まれたんだけど…」
「お願いするわ。」
「フレイヤは乗り気なのね…」
「おおと、ここで動きがありました！ロキ選手にここでクリーンヒット!!、自分には無いものを目の前で弾まされて心に傷を負い、勝負終了ー！今回の勝者はヘスティア様になります。」
「こら！何勝手に実況してるんや！しかも、なんでお前がここにおるんや！リュウ！」
　勝負が終わりこっちに来たロキに鋭くツッコまれた。
「よくぞ聞いてくれた！誰も聞かないから心配だったんだよね」
　そうして俺は神の宴へどうやって入ったか話した。
　手順は簡単
　まず、神の宴が始まる直前にガネーシャファミリアのウェイトレスの中で１番お金に弱そうなのを探します。
　そしてそいつに言い値で賄賂を渡します。
「つまり買収か。それなら簡単に入れるな。」
「ま、そういうこと。理由は面白そうだっから。あと２つ名決めるの参加したかった」
「やっぱ、その理由かいな」

ん？だって人の名前２つ名だけど自由に決めれるんだぜ？厨二病チックな痛い名前にしてそいつがどんな顔するか想像したらむちゃくちゃ面白そうじゃん。
「２つ名決めるんに参加するのはいいけどあんた一応ウェイトレスでここにいるんでしょ？仕事は？」
「そんなもの知らん。」
だって怒られるの俺じゃなくて買収されたやつだからね。その後ヘスティア、ヘファイストス、ロキと雑談してどこの誰かも分からないやつの２つ名を付けて無事帰った。

次の日
珍しく朝早く起きたのでそこら辺を歩いている。
「しかし、平和になったな～。あの頃が嘘みたいだ」
５年前は空気が重かったが今はそんな空気感は全くない。そんなことを思いながらリューの働いている豊穣の女主人の裏に行くとリューが素振りをしていた。
「おはよう。朝から元気だね～」
「おはようございます。そちらこそこんな時間に起きているなんて珍しい」
「いや、たまたま起きたもんで」
「そうですか。良かったら久しぶりにどうですか？」
リューはそういうともうひとつ木刀を投げてきた。
「懐かしいな。よしやるか！」
そうして、模擬戦が始まった。まずは小手調べに胴を狙い、次に頭、足、腕と木刀を振るが全て弾かれる。次はフェイントを入れながらもう一度胴に。しかしこれもかろうじで防がれ、リューがカウンターをしてくる。それを受け流しその反動でリューの剣をすくい上げ、手元から弾きリューの目の前に木刀を突きつける。
「はい、俺の勝ち～。」

リュウがそう言うとリューは悔しそうな目で見てきた。
「負けてしまいましたか。ですが久しぶりにやれて嬉しかったです。ありがとう。」
その後少し雑談をして帰ろうとするとリューが
「今度、アリーゼ達のお墓があるリヴィラまでお墓参りに行きませんか。」
「いいぜ、俺もちゃんとアイツらのこと弔ってやってないし。」
「それでは約束です。」
そういい、リューは朝の仕込みに行った。
「今から何しよっかなー。面白そうな怪物祭も今日じゃないし。」
予定を立てようとするがやはりめんどくさくなり結局ダンジョンに潜ることにしたリュウだった

怪物祭

今日は怪物祭。1日暇にならないと思いながら祭りに行く途中で豊穣の女主人の前でリューといつかのベル・クラネルが話していた。
「おっす。何してんのー？」
「リュウですか。おはようございます」
俺とリューが挨拶をしているとベルが話しかけていた。
「あの、もしかしてリュウ・セイヤさんですか？」
「お、そうだぞ」
「ダンジョンで助けて頂いてありがとうございます！あと、料金の立て替えも…」
「お礼がしたいならまたなんか奢ってくれな。で話戻すけど何してたの？」
リュウがそう言うとリューが話してくれた。なにやらシルが怪物祭に行ったのはいいが財布を忘れたそうでベルがちょうど来たので届けてくれないかと頼んでいたところらしい。
「じゃ、俺も一緒に行くよ。俺のスキルがあれば一瞬でしょ。」
「いいんですか。よろしくお願いします。」
「それでなんだがなんて呼べばいい？」
「ベルでいいですよ。」
「おkー、じゃあ俺の事は好きに呼んでいいよん～」
そんな会話をしながら東のメインストリートで行われている怪物祭へ足を運ぶ2人。すると、後ろからベルを呼ぶ声が
「おーい、ベルくーん！」
「あ、ヘスティア様！3日間もどこいってたんですか!?心配だったんですよ。」
「すまないね。個人的な用があったからさ。それよりデートしようぜ。」
あれ？俺空気じゃね？なんか涙出てきそう。
「どうするベル。お前の神様はデートしたそうだし。一旦二手に分かれて探すか？」

「おー、リュウ君。気が利くね。ほら、人探しならデートしながらでもできるじゃないか」
「えーと、それじゃあ二手に分かれましょうか。すいません。」
「気にするなー」
　ちっ、リア充爆発してしまえばいいのに。いっその事スキルで…
　どう、あのリア充どもに痛い目見させてやろうか考えながら闘技場の入口付近に着くとロキとアイズが居た。
「よ、何してんのー？」
「おお、リュウか。いやな、ホントは今日アイズたんとデートしてたんやけどなにやらモンスターが抜け出したらしいからガネーシャに借りでもと」
　道理でギルドの職員が忙しそうにしてる訳だ。モンスターが逃げ出して一般人に危害が及べば来年からこの祭り開催できなくなるかも知んねぇからな。
「じゃ、俺も貸し作っとこ。手伝うわ」
　こうしてアイズと2人でモンスターの駆除に出かけた。順調に倒していると何故か地面が揺れだした。そして少し先に大きなヘビ？のようなモンスターが現れた。周りを見るとすぐ近くにロキファミリアが居たので合流した。
「ご機嫌麗しゅう。ロキファミリアの皆様方」
「あ、リュウだ。やっほー」
「なんか、腹立つわね。バカにしてないでしょうね？」
「よくこんな状況でふざけられますね！」
　と、3人とも違う反応を見せてくれて非常に嬉しかった。
「ま、それは置いといてあれ知ってる？」
「いや？」
「知らないけど」
「私もです」
　なるほど完璧に新種か…でもガネーシャファミリアがそんな危ないことするか？いやでもモンスターが出てくるのにはダンジョンから出でこないと行けない。こいつら普通に下から出てきたぞ。まあ、

そんなことは後から調べればいい。そう考えているとロキファミリアのアマゾネス姉妹が新種の攻撃を素手で殴り返していた。しかし、新種にはダメージを与えられず逆に自分たちが手を少し痛めたようだった。
「どうだった？」
「打撃での攻撃は有効打ではないらしいわ」
「それじゃあ、レフィーヤの魔法でやってもらうよ」
作戦会議が終わり時間稼ぎのため、新種のモンスターに立ち向かうリュウ達。長い体躯を唸らせ横凪に攻撃を仕掛けてくる。攻撃範囲が広いので必然的に上に逃げるしか無かった。ジャンプをして攻撃を避けと思ったが腹部に強烈な衝撃が走る。何事と思い腹部を見るとさっきまで下にあった新種のモンスターのしっぽのようなものがこちらまで伸びてきている。いや、少し違う。よく見てると新種のモンスターはしっぽのような部分はまだ下にある。本体の近くを見ると地面から触手が生えてきていた。
（俺の予想ではこいつは蛇型のモンスターだと思ったが…）
そんな思考を巡らせ、解答者のスキルを使おうと思ったが新種のモンスターがどんなモンスターかが分かった。なんと顔だと思わしき部分が開き、花のように開いたのだった。モンスターの正体は花だった。それならさっきの攻撃は地中にあった根っこの部分を伸ばして来たのだろう。
気を取り直してモンスターの相手をする。茎の部分での攻撃とさらに根っこの部分の攻撃で避けるのは厳しく、コントロールの魔法で重さを軽くする、衝撃を弱くするなどして時間を稼いでいた。
（しかし、コントロールの魔法を使った途端にティオナ達を無視してこっちを狙ってきた。まさか！）
リュウは解答者の能力を使いこのモンスターがどんな性質を持っているか調べるとやはり魔力に反応することが分かった。
「ティオネ、ティオナ！レフィーヤを守れ！こいつは魔力に反応するぞ。」
リュウがそう指示をしたが時すでに遅し。レフィーヤは横腹を強

打されていた。
　そしてモンスターがトドメを刺そうとしたがそこに金色の髪をなびかせてやってきた少女が居た。そのままその少女はモンスターの頭を切り落とした。
「アイズ。ナイスタイミング。でもまだ働いてもらうぞ」
　リュウがそう言うと再び花のモンスターが現れた。しかも三体。アイズが迎え撃とうとするがアイズの魔法に耐えられなくなりポッキリと折れた。
　こうなっては頼れる攻撃手段が無くなった。なのでリュウは仕方なく魔法を使うことにした。
「くそ。終わったらなんか奢れよ！お前ら！《　智天使憑依》！」
　智天使憑依を使ったリュウは服装が変わり、神々しいオーラが溢れ出した。その光景にアイズ達は目を奪われていた。炎の剣を出したいところだがそれでは街に大きな被害が出てしまうのでリュウは《智天使憑依》で強力になった《　禁果創造》で回復スキルを作り、レフィーヤに使った。レフィーヤは困惑した顔でこっちを見てきた
「レフィーヤ！なに放心してんだ！アイズの剣が壊れた以上お前の魔法でどうにかするしかないんだよ！」
「でも…」
「なんだ。守ってもらうのが嫌か。でもそれがファミリアだろ。今度はお前があいつらを助ける番だ。ほら分かったら詠唱しろ。邪魔はさせねえから」
　リュウはそう言い、モンスターを足止めしに行った。
　レフィーヤはまず《　エルフ・リング》を唱えその次に俺のよく知ってる王女様の魔法を詠唱し始めた。
☒　終末の前触れよ、白き雪よ☒
☒黄昏を前に風を巻け。☒
☒閉ざされる光、凍てつく大地☒
☒吹雪け、三度の厳冬。我が名はアールヴ☒
☒ウィン・フィンブルヴェトル☒！
　レフィーヤの詠唱が完了するとモンスターに向かって時間をも凍

らせるかのような絶対零度の氷結魔法が放たれた。
「よし、終わったな。それじゃあ後は頼んだゾ」
リュウはそう言い《智天使憑依》を解きぶっ倒れた

そりゃあ、まあ驚くよね…

「知ってる天井ですね」
　新種のモンスターとの戦いで《智天使憑依》を使い、ぶっ倒れたリュウだかどうやらロキファミリアの拠点に連れて行かれたようだ。
「起きたか」
　声のする方を見るとリヴェリアが本を読みながら座っていた。
「事情は聞いている。迷惑をかけたな」
「迷惑だとは思っていませんよ」
　起き上がろうとするとあることに気付いた。自分には無いものがあって、あるはずのものが無くなっていた。
　つまるところ女体化だ。
「はあ、やはりですか」
「その姿を見たのも久しぶりだな」
「なりたくてなってるわけじゃないんですよ」
　なぜか《智天使憑依》を使ったあと、魔力が全回復するまで女体化するのだ。これが魔力回復をしやすくするためか、《智天使憑依》による副作用なのかは未だに分かっていない。まあ、女体化すると魔力の回復速度が上がるのでなんとも言えない。ちなみに女体化してない状態でも《操作》で女体化出来るのだが《智天使憑依》を使った後だけ自由に性別は変えれない。ちなみに口調は違和感のないように《操作》で矯正している。あと記憶が曖昧になるので何をしたか戻った時に分からない時があるから色々と面倒くさい
「リヴェリアには見せたことあるからいいのですが、この姿を知っているのは小数ですからあんまり知られたくないんですよね」
「どうしてだ？凛々しくていいじゃないか」
「私、ほんとは男ですよ。いちいち説明するのはめんどくさいんですよ」
　リヴェリアは改めてリュウの姿を見る。顔は端正（アルトリア顔）でリヴェリアにも負けておらず、髪は自分とよく似た緑色のロングヘア。

神々が見たら何がなんでも眷属にしたがるだろう。
「それにしてもこれじゃあ出歩けませんね。リヴェリア。服を貸してください」
「良いだろう。しかし、男に戻った時言いふらすなよ?」
リヴェリアはリュウにそう釘を刺し、リュウを自らの部屋に案内して服を貸した
着替えが終わり部屋から出ようとするとロキが入ってきた。
「どうや、リヴェリアたん。リュウの様子は……って誰やんねんあんた!むちゃくちゃ綺麗やないか。はっ!もしやリヴェリアたんとキャッキャウフフなことを…!」
「バカ、それはリュウだ。それに私には今のところそんな趣味はない。」
「なにぃ!リュウやと!嘘ついてもないみたいやしほんとのようやな。なら尚更リヴェリアたんの部屋から出てきたらあかんやん!リヴェリアたんもやで。いくらリュウが好きやからって」
「なぜ私がリュウを好きということになっているんだ!」
リヴェリアが顔を赤らめながらそう言うとロキが意地悪そうな顔して語り出した。
「そやな、まずはついこの前リュウが生きていたと分かった時やな~。だってリヴェリアたん滅多に歌わん鼻歌歌ってたもんな~。しかも酒場で会った時嬉しそうにしとったやん。いや~あの時の顔は思わず見とれてしまったわ。ほんでな次に…」
ロキが次のエピソードを言おうとするとリヴェリアがゲンコツをして黙らせた。
「リュウ。お前は何も聞いていない。いいな」
「大丈夫ですよ。どうせこのこと元に戻ったら覚えてませんし。」
リュウがそう言うとリヴェリアは胸を撫で下ろした。その横でロキが頭を抱えながらもそういう所で好きって分かるんやで
と考えていた。
「まあ、それはさておき。リュウに聞きたいことがあってきたんやわ。あの新種の花のモンスター知ってるか?」

「いや、あなた達が知らないのなら私が知っているわけがありません。」
「そうか…。じゃあええわ。それにしてもほんとに信じられへんわ。あのリュウがこんな綺麗な女の子になれるなんて。ウチと会う時今度から女体化して会ってくれんか？」
「嫌ですよ。あ、でもなにか頼み事する時はこれで行くかも」
　ロキはそれを聞くと帰っていき、リヴェリアと二人で廊下に出ると今度はレフィーヤに会った。
「リヴェリア様ちょうど良かった。リュウさん起きてますか？お礼を言いたくて」
「ああ、リュウなら起きてるぞ。」
「分かりました。それと質問なんですが横にいるハーフエルフの方はどなたでしょうか。」
　レフィーヤは綺麗だなと思いながらリヴェリアの返答を聞いた。
「こいつはリュウだ。リュウ・セイヤだ」
「え？リヴェリア様？そんな訳…だってあの人男ですよ。」
「それが本当にリュウなんですよね。レフィーヤ」
　リュウがレフィーヤにそう言うとレフィーヤは脳の処理が追いつかなくなったのか立ち尽くしている。
「ええと…大丈夫ですか？」
「はっ！すいません。でも本当に信じられなくて…。それはともかく怪物祭ではありがとうございました。」
「いや、レフィーヤのおかげですよ」
「それでお二人はどちらへ？」
　そういえば、何も決めてなかったな。リュウはそう思うとリヴェリアへ問いかけた。
「リヴェリア。どうするのですか？」
「そうだな…この状態のお前と居られるのも滅多にないだろう。そうだ。せっかくだ。アイズたちも連れてどこか行かないか？」
　リヴェリアはアイズたちとお出かけを提案してきた。しかし意外だ。リヴェリアがお出かけを提案するなんて。

リヴェリアへ視線を向けると
「意外か？しかしな。アイズを放置しておくとまた勝手にダンジョンに出向くからな。」
「なるほど。それではアイズ以外にも人を集めて、お茶会でもしましょうか。」
リュウたちはまた人を求めて歩き出した。

お茶会

お茶会メンバーを集めるためにロキファミリアの拠点を探していると玄関から落ち込んでいる雰囲気のアイズが帰ってきた。
「アイズか。借金で落ち込んでるとこすまないがこれからお茶会をするんだ。参加してくれないか？」
「誰が来るの？」
「私とリュウとレフィーヤが今のところ揃ってるな」
「リュウ起きたの？」
「はい。起きましたよ。」
俺がアイズにそう答えると
「誰？」
「リュウですよ」
「リュウは男だよ？なにより顔が全然違う」
俺がリヴェリアを見ると察してくれたようでアイズに説明しだした。最初は納得してなかったが《操作》の魔法を見せると納得してくれた。
「よし、順調に人数集まってきてますね。」
「そうだな。どうする？このまま行ってもいいが…レフィーヤ。アイズ。誘いたい人物はいるか？」
「いえ、特にはいません」
「私も」
よし、それじゃあ行くとしますか。こうして俺含め４人は豊饒の女主人に向けて足を進めた。

何事も無く豊饒の女主人に着き、店内へ入った。受付はシルさんだった
「何名様ですか？」
「４名です」
「ロキファミリアの皆さんと…後は」
「あ、リュウです。リュウ・セイヤ」

「ほんとですか!?」
「リュー呼んできてもらったら分かりますよ」

シルは厨房でじゃがいもの皮むきをしているリューをミアさんの許可を貰い、引っ張ってきた。
「シル。いきなりなんなんですか。」
「ねえ、リュー。この人リュウさん?」
「そんなの見れば…そういう事ですか…。そうです。リュー・セイヤ本人です。しかし、リュウまた無茶をしましたね」
「いや、今回はスキルを強化するために使っただけだからそんなに無茶はしてませんよ」
スキルを強化するために使っただけなので本当に無理はしていない。いつもより早く目覚めたのが証拠だ。
「それならよかった。」
「では、あちらの席に座ってください。」
シルに案内された席に座り、注文をした。ちなみに俺がコーヒーでリヴェリアとレフィーヤが紅茶。アイズはジュースを頼んだ。
「それでどうします?誰か話すネタありません?」
「さっきのやり取りで聞きたかったのだがエルフの店員とは知り合いなのか?随分親しかったように見えたが…」
リヴェリアがリューについて聞いてきた。そっかリューって今は身分隠して働いてるもんな。適当に誤魔化しとくか。
「いえ、昔に助けたことがあったんですよ。何回か会ったりもして親交があるだけですよ。後、この口調やめてもいいですか?魔力早く回復させたいので」
リヴェリアは少し納得をしていない顔していたが引き下がってくれた。さすが空気を読める。
「私からもひとついいですか?」
次はレフィーヤが質問をしてきた。どうやら並行詠唱を練習しているが上手くいかないらしい。
「それなら、そこにいるオラリオ1の魔法の使い手がいるじゃん。リ

ヴェリアちゃんと教えた？」
「いや、どうしたら出来るかは教えたんだが中々できないそうなんだ。」
「それで、魔法剣士の俺にコツを教えて欲しいと…」
「はい」
「でもな、俺の魔法って短文詠唱だからな…。そっちみたいに長くはないし参考にはならないかもしれないけどいい？」
「教えて頂けるのならなんでもいいです。」
「そうだな。俺が意識してるのはいかに魔力暴発しないように意識してるかな。最初は本来の威力が出なくてもいい。自分が動きながら唱えられるギリギリの威力で練習する。で慣れてきたらちょっと威力をあげる。その繰り返しかな。」
「なるほど。次から意識してやって見ます。」
　レフィーヤに並行詠唱のコツを教えると次はリヴェリアが質問して来た。
「ずっと聞きたかったのだがお前が女になる時誰をイメージして変わってるんだ？」
「ああ、それか。その答えはもし俺が女として生きていた世界線のものをイメージしている。というより引っ張ってきている。」
　実際、《解答者》で自分が女として生きている世界線の姿を調べ、そのまま使っている感じだ。まあ、この場のだれも理解していないようだったが。
「ずっと気になっていたんですけど、リュウさんとリヴェリア様ってどんな関係性なんですか？」
　レフィーヤが俺とリヴェリアの関係性を聞いてきた
「そうだな。こいつはわたしの召使いだったんだ。召使いであり、気の許せる友人だ」
「え⁉リヴェリア様の召使い⁉じゃあ、もしかして２人が仲がいいのは…」
「ま、リヴェリアの歳の数の付き合いだ。相当長い付き合いになるな。俺の年齢を教えたら間接的にリヴェリアの年齢が知れるぞ」

年齢の話をするとリヴェリアがこちらを思い切り睨んでいる。分かった分かった。言わないから。リヴェリアを揶揄っていると次はアイズが質問してきた。
「リュウの魔法について知りたい。だめ？」
「こら、アイズ。他人のステイタスを聞くのはご法度だろう。」
「いいよ。リヴェリア。《操作》の方で良いんだよな？」
「うん。」
アイズに何から聞きたいと言ってみると、少し考えた後どこまでが操作できて、何が操作できないかを聞いてきた。
「そうだな。まず操作できないものだけどあまりに大きいとか規格外のものは操作できないかな。それ以外ならなんでも操作出来るかな。恩恵なんかも操作できるぞ。」
俺が説明するとアイズたちは驚きさらに質問してきた。
「恩恵を無条件で操作できるか？」
「そんなわけない。考えてみ？俺の魔法は元々あったものをいじる魔法だ。０から１は生み出せない。例えば力のステイタスをあげるだろ？そうしたらそれと同じぐらい器用のステイタスがさがる。器用を上げれば力がさがる。俊敏を上げれば耐久がさがる。耐久を上げれば俊敏がさがる。ちなみに他のやつのステイタスも少しならいじれるぜ。その代わり接近しないといけないがな」
その後も俺についての質問会が開かれ、どんどん時間が過ぎていった。順調に魔力も回復して男の姿にも戻れた
「そろそろお開きにするか？俺も元の姿に戻ったし」
「そうするとしようか。」
「今日はリュウさんのこと、沢山聞けて楽しかったです」
「楽しかった」
「じゃあ、おつかれ～」
こうしてロキファミリア＋αのお茶会は終わった。